

法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

世界の中の能：外国人の能楽発見

著者	西野 春雄
出版者	法政大学国際日本学研究所
雑誌名	国際日本学
巻	1
ページ	93-117
発行年	2003-10-31
URL	http://doi.org/10.15002/00022554

世界の中の能 —外国人の能楽発見—

西 野 春 雄

はじめに

初めて能や狂言に接した外国人たちは、そこに何を発見し、何を感じたであろうか。能や狂言は外国人たちの眼に、心に、どのように映ったであろうか。あとで触れるが、全く理解できず死ぬほど退屈した人たちもいたが、能や狂言に魅せられ、感動した芸術家や研究者たちは、先入観にとらわれず、新鮮な眼で、新鮮な感性で、能・狂言の本質を鋭く洞察している。

以下、初めて能に触れた外国人たちの発言やエッセイ、あるいは先駆的な研究を通じて、外国人の能楽発見について述べる。なお外国人の能楽研究や謡曲翻訳に関する研究としては、池内信嘉「外国人と能楽」（『能楽盛衰記』下巻所収、1926、能楽会）、野上豊一郎「謡曲の翻訳について」（『翻訳論』所収、1938、岩波書店）、市河三喜「謡曲の翻訳」（『能楽全書』第三巻「能の文学」所収、1943、創元社）、古川久「欧米人の能楽研究」（『明治能楽史序説』所収、1971、わんや書店）、幣原道太郎「欧米における世阿弥研究」（『文学』1963・1、岩波書店）、田代慶一郎「英語世界における謡曲－フェノロサからウエイレーまで－」（『鑑賞日本古典文学 謡曲・狂言』所収、1977、角川書店）、川村ハツエ『能のジャポニズム』（1987、七月堂）、成恵卿『西洋の夢幻能 イエイツとパウンド』（1999、河出書房新社）などがある。

1 野上豊一郎の提言

漱石門下の英文学者で、常に新しい視点から能楽研究を開拓した野上豊一郎

法政大学元総長は、「新しい目を以て見、新しい頭を以て考へるのでなければ、能の最も本質的なものは捉めない。…一種の言ひ方をして言ふならば、能の本統に芸術的な研究は、われわれが外国人の目を以て見直し、外国人の頭を以て考へ直すところから始まらねばならぬ」と提言している（『能の再生』序言、1935、岩波書店）。たしかに、古い見方や先入観にとらわれていては、能や狂言の本質を把握することはできない。この提言は今も新しい。

さて、2001年5月、日本の能と狂言がユネスコの第一回「世界無形文化遺産の傑作の宣言」として登録されたこともあって、能楽は、これまで以上に国際的にも注目されている。そして実に様々な国々の言葉に翻訳されている。世阿弥の芸術論も訳され、今日では、音楽や演技、能面や能装束なども視野に入れた多角的な研究も発表されている。

2002年10月、法政大学は文部科学省の21世紀COEプログラムに申請した『日本発信の国際日本学の構築』が採択され、能楽研究所もその一翼を担うことになり「世界の中の能楽」に向けて動き出している。こうした状況をも踏まえ、本学で開かれた第64回私立大学図書館協会総会・研究大会を記念して、2003年7月と8月、能楽研究所・資格課程コース・図書館が共催した資料展「世界の中の能－外国人の能楽研究」は、外国語で発表された能や狂言の翻訳書や研究書・解説書・図録などの文献資料を中心に、近代以降の外国人による能楽研究の軌跡をたどる試みであった。本稿もそれにちなんだものである。

2 野上弥生子「藤戸」について

いったい、能とは何か。ごく簡単にいえば、詩と音楽と舞・所作が融合された劇なのであるが、これについて、野上豊一郎総長夫人の弥生子氏の言葉を紹介したい。『野上弥生子全集』第Ⅱ期 第二十九卷（1991、岩波書店）に収められているエッセイ「藤戸」について」（1966年11月発行『劇団芸協』7号に掲載）の冒頭の一節である。

あらためて説くまでもなく能は舞ものであり、なほ表現は極端にまでわづかしか許されない。能が象徴芸術の見本のごとくいはれるのもそれ故

で、あらゆるものが有つて、しかも無にまで及んでいる能面は、その本質をなにより明らかに示すものといふべきである。ほんの方型の空間に過ぎない舞台、正面の板壁に図案化された松の絵が見られるのみで、いはゆる舞台装置なるものは完全に無視されたからつぼの板の間。たまたま必要とする小道具の汐くみ車は、子供のおもちやほどもないものであり、宮殿楼閣が小屋ほどもない一畳台であらはされ、一もとの薄が王朝時代の多恨な詩人と恋をんなとの、遠い夢のあとなる秋の古寺の幽寂をただよはせる。またそれらの物語の悲しみ、嘆き、恨み、あるいは愉しみ、喜びの種々相を、笛、大小の鼓、時に太鼓に囃されての伴奏で舞い、うたう役者たちの声は、つけた仮面の拘束のため、内にこもり、一種精霊的なひびきでなまの声音よりはかへつて人のこころを奥ふかく打つ。かうしていいよ誘ひだされる眩想で観客は眼が見ている以上を見、耳が聴いている以上を聴くのである。

野上弥生子氏は能の特質を的確に把握している。「あらゆるものが有つて、しかも無にまで及んでいる能面は、その本質をなにより明らかに示すものといふべきである」は、味わうべき文章であり、「いいよ誘ひだされる眩想で観客は眼が見ている以上を見、耳が聴いている以上を聴くのである」という結びの言葉は、能の本質を鋭く洞察した言葉である。たしかに能は、何よりも観客の想像力に訴える劇なのである。

このことに関連し、現在、ベネチア大学で日本語・日本文学、特に浄瑠璃を研究しているルペルティ・ボナヴェントゥーラ教授の言葉が印象的なので、紹介したい。「大掛かりなハリウッド映画のように、その情景を全部再現させなければ、精神的に貧困な現代人の目をひけないと考える、想像も知的な拡張りももたないような理念と完全に異なった、言葉と所作、役者の芸だけで情景、情趣が描け、想像力の翼を羽ばたかせ、目前に夢を喚起させるような真の芸術」という指摘である（『観世』2001年9月号）。「言葉と所作、役者の芸だけで情景、情趣が描け、想像力の翼を羽ばたかせ」るのが能であり、よく本質を衝いていると思う。

3 能・狂言との出会い 能・狂言が初めて外国語で言及された文献

ところで、能とは、本来、能力・技能・才能の意味で、専門的技能の持ち主が発揮するワザはみな能であった。それが、芸能者の演じるワザについて多用され、南北朝以後、芸能界の主流となった猿楽の役者が演じる歌舞中心の劇形態のワザも同じく「能」と呼んでいたために、「能」が劇形態の芸をさすようになったのである。

能や狂言が欧文の文献に載ったのは、1603年（慶長8）に長崎で刊行された『日葡辞書』である。周知のように、この辞書は織豊期に來日した宣教師たちが2万を超える日本語をポルトガル語に翻訳・編纂した辞書で、能は、

Nô.ノウ（能）技能，才能，または，能力．また，演劇〔能〕．Nôuo suru.
（能をする）演劇〔能〕，または，悲劇などをする，あるいは，演ずる．

と記述しており、原義も正確に把握している。

狂言も「Qiôguen. キャウゲン（狂言） Curû cotoba.（狂ふ言） 幕間滑稽劇． Qioguen uo yu, i, suru.（狂言を言ふ，または，する）幕間滑稽劇を演ずる」と説明している（以上『邦訳日葡辞書』、岩波書店、1980）。

東洋の文献では、幣原道太郎「欧米における世阿弥研究」によると、中国の文献『全兵浙制考』三巻の付録として、明の万暦20年（1592）ごろに刊行された中国人の日本研究書「日本風土記」（「日本考」）が能謡に関する最初の言及であるという。すなわち巻之二「娼優隸卒」に「嘔打（うた）」、「奴（の）」の文字が見え、前者は「歌或は謡」、後者は「能」を意味するようであり、同書巻之四「流賤」に「戯子索弄挨」とあって、「戯子」は役者、「索弄挨」はサルガク（猿楽）を意味するようである。

西洋・東洋ともほぼ同じ時期に外国語で紹介されているのが面白い。

4 フロイスが見た能

さて、織豊期の演能の実態は、葡萄牙（ポルトガル）の宣教師ルイス・フロ

イス（1532－1597）が九州でまとめた『日欧文化比較』の第13章「日本の劇、喜劇、舞踊、歌および楽器について」（岡田章雄訳、岩波文庫）や神戸市立博物館蔵『観能図屏風』から分かる。フロイスは西洋の演劇と比較して、次のように記している。

- (1) 西洋の劇は、普通夜間に演じられるのに対し、能は日中も夜間も演じられる。
- (2) われわれの劇は詩である。彼らののは散文である。
- (3) われわれの劇は出し物が変化に富み、新しいものが創造される。彼らの物は始めからすべて決まりきっていて変わることがない。
- (4) われわれの劇では、登場人物は人に見られない他の建物から来る。日本人は船の幕がかけられた舞台のかげにいる。
- (5) われわれの劇は談話によって演ぜられる。彼らののはほとんど常に歌い、また踊る。
- (6) われわれの間では、劇の最中に騒ぐことは妨害であり、怪しからぬことであるとされるが、日本では外にいる者が大きな叫び声をあげることが演技者を褒め飾ることとされている。
- (7) われわれの間では、仮面は顎を鬚（あごひげ）から下まで蔽うている。日本のは極めて小さく、婦人の役を演ずる場合でも下から鬚が見える。

いずれも興味深い比較である。西洋の劇詩と能の文体の比較、能の演目の固定化が進んでいたこと、能の揚幕（船の帆のように感じたのであろう）と鏡の間の存在、能が歌舞を中心とする楽劇であること、現在は歌舞伎に残っているが、観客は掛け声をかけ役者を褒め囃していたこと、能面の寸法が顔を蔽う程度に小さいことを伝えるなど、面白い内容である。当時の観能風景は先述の『観能図屏風』が良き画証となろう。緋毛氈に座した南蛮人の姿が見える。多分彼らも、フロイスと同じ感想を抱いたに違いない。

江戸時代には、朝鮮通信使一行が江戸城で鑑賞している。たとえば、観世文庫蔵『御本丸朝鮮人御馳走之御能組』や『徳川実記』によると、寛永20年（1643）7月18日に、「朝鮮人御馳走之御能」が江戸城本丸で催され、観世左近重成ほかの能を鑑賞している。

一方、風雲急を告げる幕末や明治維新にも、たとえばイギリスの外交官アーネスト・サトウなどが麻布の金剛大夫邸で観能し、謡本に目をやりながら鑑賞している観客のことや、自分にとっては能よりは狂言が分かりやすいなどと感想をもらしている（『一外交官の見た明治維新』田中彰訳・岩波文庫）。

5 外国人による能・狂言の研究の始まり、欧米での能面珍重

外国人による本格的な能・狂言の研究の始まりは19世紀末である。周知のように1800年代の西洋ではジャポニズムが流行し、日本の浮世絵などがヨーロッパの美術に影響を与えた。能面や能装束も珍重され、たくさんの能面や能装束が海外に流れ出た。そのあたりの事情を1885年（明治18）9月19日付の『東京日日新聞』はつぎのように報道している。

（前略）欧州にてはまた日本風の流行の日々弥増して、倫敦にても巴里にても日本芝居を興行して大入を得たるよりの思付にや、幕府の頃に製作したる能の面や能の装束は極て結構なる品なりとて之を買集むる為に、仏国人某は処々に注文を出し、既に面の数は二百余、装束の数は三百余をも横浜および東京にて買入れたり。其中にも、名作の面には数百円を払へりと云へり。此噂を聞きて、其の営業者は東西に奔走して買集め最中なり。之を齎し帰りて何れ劇場の用にも成すべきならんが、束髪髻に静の面をかけ、中形小袖の上に繻袷の袷衣をなして是が日本の女粧なりなど云ふなるべし。但し、さる不倫の粧は今日東京にて間々其類を見るなれば、異しむに足らざるべき歟。

また1890年（明治23）11月12日付の『読売新聞』は「能面、大に世に出でんとす」という見出しで報じている。

能の面は近頃其の価を減ぜんとしたるが、欧州に於ては頻りに之を珍重し、五百羅漢を五万円に買はんと云ひし程なれば、能面の名作ものは大に其の価格を回復し漸次海外に飛行する傾きなれば、九鬼、榎本の諸氏は頻りに

之を買入れられ、以て其の名作物を奪れざらん事を勉居（つとめお）らるゝ由なるが、徒（いたず）らに之を蔵（おさ）むる時は殆ど無用の長物たるに過ず。依（よつ）て府下三四の有志者は沢山（たくさん）此の能面を集めて一の大廈（たいか）を築き、壁又は天井に其面を掛けて諸人の縦覧に供し、古物買入れのため時々我国へ来遊する欧州人、就中（なかんづく）独逸、伊太利の人々に一覽せしめんと計画し居れりと云ふ。

当時の欧州での珍重ぶりが伺える記事であるが、ちなみに、筆者は、ここ数年これら海を渡った能楽面の調査・研究をしている。これまで主にヨーロッパの国々を回り、近年はロシアやアメリカにも足を延ばし、都合、9ヶ国、20都市、27機関を訪ねたところで、狭い見聞ながら、少なくとも3000点を越える能楽面が海を渡っているように思われる。日本では失われてしまった「雪鬼」の面にイタリアはフィレンツェで出会うという感動の一瞬もあったが、展示されている面もあるものの、そういうケースは少なく、粗末な紙に包まれて倉庫の片隅で泣いているような能面に出会い、何とも可哀想にと思うこともしばしばだった。いつか、これら海を渡った能楽面たちの里帰り展を開催したいと夢みている。

なお、能楽面の流出に関しては、西野「海を渡った能楽面」（『能楽研究』第22号、1998、法政大学能楽研究所）を参看していただければ幸いである。

6 特命全権大使岩倉使節団の果たした役割

ところで、1869年（明治2）来日した英国のエジンバラ公アルフレッド王子が能を鑑賞している。以後、訪日した欧米の賓客たちに、能楽が鑑賞に供せられた。この背景には、明治4年から6年にかけて特命全権大使岩倉使節団に随行した久米邦武の、米欧を回覧した体験があると思う。彼は西洋の王宮にはオペラの舞台があり、日本でいう能舞台のようなものと実感。『米欧回覧実記』第五十七卷伯林府総説に「夜、皇帝ノ劇場ニ赴ウ〈是ヲ「オペラ」ト云、諸種ノ芝居中ニテ最上等ナルモノ猶我猿楽ノ如シ〉」（岩波文庫）とある。

皇帝の劇場で演じられる端正なオペラを鑑賞して「最上等」の芝居と感じ、

日本では能楽が日本固有の歌舞音曲であることに想い至り、帰朝後、早速、日本の国家的な儀式典礼を支えるものとして、能や狂言を見直し、能楽こそ国民性情の底に根ざした「花」と捉えたのである。能は当時、一般的には猿楽と呼ばれていたが、久米たちによって「能楽」の呼称が創案された。以後、久米は能楽の復興に力を尽くし、文化史的視野から能楽研究を推進したのである。

また芸術の発展には批評が必要不可欠と、当時の『読売新聞』社主子安峻に勧めて能評を掲載させたのも久米邦武である。爾来、各新聞とも競って能評を載せ、能楽論壇界が活発になって行った。

一方、岩倉具視は、1876年（明治9）自邸での天覧能を催し、以後、皇室や華族の庇護を背景として、衰微した能楽の復興に積極的に乗り出し、今日の基を作った（西野春雄「能楽研究と復興に尽くした久米邦武」『葉隠研究』第45号、平成13年11月、葉隠研究会）。

7 リリカル・ドラマの発見

さて、謡曲が最初に外国語に訳されたのは、1876年（明治9）、イギリスの軍人 Fredeirck Victor Dickins（ディキンズ）（1838－1915）による〈高砂〉とされている。ディキンズの能の英訳については川村ハツエ訳『F・V・ディキンズ－日本文学英訳の先駆者－』（七月堂、1997）が詳しい。もっともOED第2版（1989年）の「Nō」の項目では、1871年（明治4）にA.B.Mitford（ミットフォード）が著した“*Tales of Old japan*”（London, 1871（『昔の日本の物語』）が能に関する英文表記の初出らしい。彼は、能をクラシカル・オペラの一種で、Nōと呼び、特別に建てられた舞台で演じると説明し、能のような文章は全く不可解と匙を投げている。幣原氏によれば、同書には〈弓八幡〉〈経政〉〈羽衣〉〈小鍛冶〉の4曲と、狂言2曲の梗概、および能や狂言に関する考察が収められているが、これらは前述した1869年（明治2）7月、The Duke of Edinburgh（英国エジンバラ公）東京訪問に際し、外国係総裁伊達宗城の肝入りで、東京の紀州藩別邸で行われた能楽鑑賞会の手引きとして用意されたものを、後に刊行したものということである。

ついで外交官で日本学者の William George Aston（アストン）（1841－1911）

の“A History of Japanese Literature” (London, 1899『日本文学史』)の中で〈高砂〉を英訳し、解説している。アストンの謡曲研究については、いちちやく雑誌『能楽』第5巻第2号(明治40年2月)に「アストン氏の謡曲観」と題して、第五巻南北朝と室町時代の第三章「詩歌－能(詩劇)と狂言(笑劇)」の主要部分が雨村生によって和訳・紹介されており、当時の関心の深さが推測される。なお同書の全訳は川村ハツエ訳『日本文学史』(七月堂、1985)まで待たなければならなかった。

同じく日本学者 Basil Hall Chamberlain (チェンバレン) (1850-1935) も “The Classical Poetry of the Japanese” (London, 1880『日本人の古典詩歌』)の中で〈羽衣〉〈殺生石〉〈邯鄲〉〈仲光〉を英訳しており、これについても川村ハツエ訳『日本人の古典詩歌』(1987年、七月堂)がある。能楽研究の先駆者の一人であるチェンバレンについては、のちほど触れることにしたい。

やがて、謡曲を読むだけでなく謡を稽古する外国人も出現した。たとえば、大森貝塚の発見で知られる動物学者の Edward・S・Morse (モース) (1838-1925) である。彼は浅草厩橋の初代梅若実 (1828-1909) に就いて謡の稽古をした。『梅若実日記』第四卷(梅若日記刊行会編、2002、八木書店)によれば、1883年(明治16)1月27日、米国人モース入門の記事があり、『当座扣』にも「明治十六年一月廿七日 モーロス門入」と見える。このことはモースの “Japan day by day” (Boston & New York 1917『日本その日その日』石川欣一訳、東洋文庫・平凡社)に、1883年(明治16)1月、梅若実と対座して謡を歌っている姿をスケッチして載せていることから知られる。彼には、ある時、電車の中で突然〈鞍馬天狗〉の一節を謡い出して乗客を驚かせたというエピソードも残っている。

また東洋美術研究家 Ernest Francisco Fenollosa (アーネスト・フェノロサ) (1853-1908) は、1883年(明治16)、モースに誘われて梅若実に入門し、謡を習っていることも、同じく『梅若実日記』第四卷(八木書店)や『当座扣』から知られる。すなわち『当座扣』に「同二月廿日 フェネロサ門入」と見え、同書には次のような記事もある。

一 本郷大学校ニテの咄し フェノロサの夫人声の咄し

一 外国人ニ謡曲ノ稽古 古今未曾有 米国人モーロス大学校教師 同国

人フエノロサ

一 外国人ノ尋、片足ノ秘事ヲ被尋ル事 是珍敷尋ナリ。

フェノロサは日本語をよく解せなかったが、英文学者の平田禿木（1873－1943）の助力を得ながら、能を鑑賞し、研究し、能の美を追求した。フェノロサについては後で少し詳しく触れる。

一方、フランス語文献における初出は、1874年（明治7）8月15日付“*Revue des Deux Mondes*”に掲載されたブスケなる人物の「日本の演劇－ドラマとコメディ」のようである。14世紀に日本演劇に現れた宗教的で伝統的な性格の *drama lyrique* と説明している。注目すべきは能を日本のリリカル・ドラマと把握していることである。リリックないしリリカルという言葉には、声を出して歌う、という意味と、叙情詩という意味もあり、能が、音楽劇であり、かつ詩劇であることを洞察しているのである。

ほかに、フランス人による先駆的な仕事では、法政大学の前身である和仏法律学校の第二教頭 Michel Revon（ミッシェル・ルヴオン）（1867－1947）が主宰した“*Revue Française du Japon*”（『仏文雑誌』）第3～4号（1897＝明治30年）には、能〈橋弁慶〉や狂言〈伯母酒〉の仏訳が載り、挿絵として川端玉章の彩色版画も付載されている。

翻訳者は、1889年（明治22）に宣教師として来日した仏人の Noël Péri（ノエル・ペリ）（1865－1922）である。日本語に堪能で音楽家でもあったペリは、若き日に上記の作品を仏訳したことが端緒となって、能に惹かれ、以後、本格的な研究を進めていくこととなった。のち友人のクロード・メートル（1876－1925）の世話で彼が学院長を勤めるハノイの極東学院の有給研究員となり、研究に没頭する。都合五回程来日し、鑑賞や調査・研究を進め、1909年から20年にかけて、同学院の紀要に“*Etudes sur le Drame lyrique Japonais (Nô)*”（能楽研究序説）という優れた研究を発表している。

この紀要が雑誌『能楽』を主宰する池内信嘉の元に届けられるや、池内はその邦訳を「能の研究」と題して『能楽』大正2年（1913）1月号の付録として掲載した。何と72頁にもわたる大論文である。彼の研究は、それまでの文芸的

研究とは異なり、当時入手可能な文献資料をできるだけ集め、それらを精緻に読みこなし、実際に鑑賞しつつ、考察を進めていくもので、その考察の対象も、能の歴史、構造、形式、舞台、衣裳、などと幅広く、総合的研究を目指しているのが特色のひとつである。

かくして、ペリをはじめ外国人たちは、掛詞や縁語や序詞などの修辭詩法と格闘しつつ、文学作品として、あるいは戯曲として、さまざまな翻訳を試みているが、能がりリカル・ドラマであるという認識は今日に至るまで西洋の人々に共通している。

8 チェンバレン、ストープスの仕事

先述したように、東京帝国大学で言語学を講じた日本研究者のチェンバレン(1850－1935)も能に魅せられた一人であった。『日本事物誌』(初版は1890年＝明治23)で、能について次のように記している。高梨健吉訳の東洋文庫本(1969、平凡社)で示すと、「劇場(Theatre)《1905年版》、日本の劇場が特異な重要性をもっているのは、すべてが改革された現代においても、昔の日本の生活を研究できる唯一の場所だからである。日本の演劇も興味ある歴史をもっている。それは、遠い大昔に、原始的な合唱に合わせて踊った宗教的な踊りに溯ることができる」と起筆し、「15世紀初頭に、これらの踊りは改良された。教養の深い仏僧達と、遊び好きの将軍〔足利〕義政がこの問題に乗り出し、宗教的踊りに民間の物語を結びつけ、新たな出発を始めたのであった。物語の主題は歴史と伝説であり、種々の出处から集めた断片的な詩歌を加えたものである。(略) それとは独自の発達を遂げて、日本の抒情劇が誕生した」と指摘し、日本におけるりリカル・ドラマの誕生と把握している。そして、

これは、能と呼ばれ、建物〔能舞台〕は——半ば舞踊の舞台であり、半ば演劇の舞台であった——能を上演する目的で専用に建てられた。コーラス〔合唱隊〕は同時にオーケストラ〔囃子方〕でもあったが、そのまま残り、ふたりの人物が登場して新たな興味を加えた。彼らは動きまわり、詩歌の節々を演劇風に吟誦する。その結果は、古代ギリシアの演劇と不思議なほ

と類似するものがあつた。〔西洋古典劇の〕三一致の法則〔時の一致・場所の一致・筋の一致〕が、決して理論化されることはなかったが、嚴重に実行された。〔ギリシアと同様に〕同じコーラスがあり、しばしば^{マスク}仮面をつける役者達には同じように気品の高い所作があつた。(略) この芸術を四百年間、父から子へ相伝えてきた各家元によって、今でも上演されている。〔舞台には〕背景はないが、衣裳は素晴らしい。観客は主として貴族や貴婦人から成り立っているが、この観客すらも見るに足るべき物である。彼らは単に楽しむために来るのではなくて、勉強するために来るのであり、彼らは、本を手にして劇を理解してゆくのである。というのは、使われている言葉は、美しいけれども古い言葉であり、特に詠唱される時には理解し難いからである。ところで、その音楽は東洋的である。だが、古風であること、東洋的であることを充分に酌量すれば、それはある種の玄妙不可思議なる魅力を有する。

とその魅力を語り、痛快にも「能は、もっと古いものであり、日本人自身にとっては難しいものではあるけれども、外国の読者にとっては幾分か理解し易いのである。能は簡潔明晰な性格をもっているからである。現著者は、日本研究に熱心であつた若い時代に、能の幾つかを手がけたことがある。それらは、他のものと一緒に、『日本古代の詩歌』と題する本の中に収めて出版された。この遠い昔の著書から、当時翻訳したもの的一篇を掘り出したいと思う。「羽衣」と題するもので、富士の麓に近く、東海道からちょっと離れた美しい所の三保〔三保の松原〕の古い伝説に基づいた話である」と説明し、

散文のところは逐語訳をしたが、抒情詩的なところは止むを得ず自由訳を施した。全体的効果として、読者に、この作品の繊細な、彫像のように威厳のある優美さを伝えることに成功できればよいとう。もし読者が、音楽と舞踊が能の本質であることを記憶に留めておかれるならば、エリザベス女王時代の^{マスク}仮面劇によく似たものを、遠い異国のこの作品の中に見出すことができるであろう。

と記して、〈羽衣〉の翻訳を載せている。彼は、能を「日本中世の抒情劇」と把握し、「日本文学の中でかかる愛すべき能が存在することを、まだ読まぬ欧州人に知らせる手引き草ともなれば」と〈羽衣・邯鄲・仲光・殺生石〉を翻訳して『日本の古典詩歌』に収め、1880年（明治13）ロンドンで出版したのであった。

イギリスの生物学者で婦人運動家の Marie Stopes（マリー・ストープス）（1880－1958）も能に魅せられた一人である。彼女は日本滞在中、月に向って謡う学生の謡に感動し、音の響きの美しさや詩歌のような文学的魅力に惹かれたという。そして、東京帝国大学理科大学長桜井錠二（1858－1939）の協力を得て、英訳を進め、帰国後の1913年（大正2）、〈三井寺〉〈求塚〉〈景清〉〈隅田川〉の全訳ほかを収めた“*Plays of Old Japan : The Nō*”（London, 1913『古き日本の劇－能』）を出版した。能の翻訳書では初の単行本の誕生であった。1927年に重版されている。

選曲を見ると、全体に静かながら、深い劇性を湛え、詩的情趣に富んだ作品であることが注目される。しかも今日の作者考定に照らし、私が「音の劇詩人」と呼んでいる観世元雅の作品およびその可能性の高い作品が選ばれているのは注目される。これは、能に詩的な美しさを見いだすとともに、マリー・ストープスの人間理解の深さを示す視点を感じさせるものと考えられるのである。なお彼女の生涯と能の翻訳については、成恵卿『西洋の夢幻能－イエイツとパウンド』（1999、河出書房新社）が詳しく、参照していただきたい。

9 ウェーリー、ペルチンスキーの仕事

イギリスの東洋文学研究家で翻訳家で、大英博物館東洋絵画版画部に勤務の Arthur Walay（アーサー・ウェーリー）（1889－1966）も謡曲の詩的魅力に惹かれた一人である。ウェーリーには、中国文学に関する翻訳書や研究書があるが、日本文学では『源氏物語』の全訳が有名である。その源氏物語に先立って発表されたのが、“*The Nō Plays of Japan*”（London, 1921『日本の能』）である。同書には、〈敦盛・生田敦盛・経政・熊坂・烏帽子折・橋弁慶・景

清・鉢木・卒都婆小町・鶺鴒・綾鼓・葵上・邯鄲・放下僧・羽衣・谷行・生贄・初雪・白楽天）ほか19曲の翻訳と、16曲の梗概、それと狂言〈餌差十王〉の翻訳が収められている。廃絶曲の〈生贄〉や演能が稀な〈谷行〉が含まれているのも興味深い。周知のように、のち〈谷行〉を読んで触発された劇作家ブレヒトがオペラ“DER JASAGER”（ヤーザーガー）を創作している。この“The No Plays of Japan”は版を重ね、今日でもペーパーバックの形で出版されている。

彼は一度も訪日しなかったのであるが（古典文学作品から想像した昔の日本のイメージを壊したくなかったからだという）、生涯、能をみる機会のないイギリス人の読者に、読んだだけで味わい理解できる、いわば味読できる詩劇の翻訳の提供をめざしたのであった。「舞台芸術としての能は減びることがあっても、その詞章は永遠に残る」と言っている。

しかも、世阿弥の能を知るには世阿弥時代の様子が分からなければならないとの立場から、当時発見されたばかりの吉田東伍（1864－1918）の校注になる『世阿弥十六部集』（編輯兼発行者・池内信嘉（1858－1934）、発行・能楽会、明治42年＝1909）も読み、イントロダクションに、頻繁に世阿弥の芸術論に言及している。これは、ヨーロッパで最初に世阿弥の芸術論を紹介した仕事でもある。

そのウェーリーと親しく、光琳・北斎など浮世絵版画についての著作もあるドイツの東洋美術史家 Friedrich Perzyński（フリードリッヒ・ペルチンスキー）（？－1954?）は、ヨーロッパに在る能面を徹底調査・研究し、さらに日本を訪れ、能楽の名家金剛家所蔵ほかの能面も綿密に調査し、博士論文としてハンブルク大学（当時は大学ではなく商科高等学校といった）の Karl Adolf Florenz（カール・アドルフ・フローレンツ教授）（1865－1939）に提出したのである。そして1925年（大正14）、このドイツ語による優れた画期的な論文は能面研究書“JAPANISCHE MASKEN NŌ UND KYŌGEN I・II”として、ドイツはベルリンのヴァルター・デ・グリューター社から出版された。I・II巻併せて660頁余りの大冊である。

「日本の面打芸術の発展史は実は日本でこそ書かるべきである。それは処女地

であった。ヨーロッパの文献では、取るに足らぬ無駄話の繰り返しを出ることはなかった。赤鶴は日本最大の彫刻家の一人であるのに、二行で片づけられた」。この衝撃的な文章で始まる、緻密かつ浩瀚なこの大著が発行された大正末年当時の日本には、これに匹敵する研究書はまだ生まれていなかった。彼の執筆意図は、次に引用する第一章「能」の結びに明らかである。

高い嶺の風、それは今もなお能の舞台の上に吹いている。この旧教にこりかたまったような芸術が今日まで様式の純粹さと、その形式の緊密さとを保ちえたのは、面を捨てなかったことと、面の有益な拘束力とに少なからず負っているのである。そして他のいかなる民族もこの分野では、日本の面打師たちの作品と、その成熟した美しさという点で競えるようなものは何ものこさなかったのに、日本の外では、それが同時にこの五百年間の日本彫刻史でもあるところの、能面というあのけだかい芸術部門の歴史は未知も同然なのである。この歴史の輪郭をえがいてみることに、本書はその試みである。(吉田次郎氏の翻訳稿による)

五百年以上にわたって、能の表現が「その様式の純粹さと形式の緊密さを保ち得たのは、面を捨てなかったことと、面の有益な拘束力とに少なからず負っている」という指摘は、仮面劇としての能を考える上で重要であり、今も新しい。

遠く離れたドイツで進められた彼の能面研究は、野上豊一郎博士をはじめ後年の能面研究に携わる者に大きな衝撃を与えたようであるが、にもかかわらず、日本だけでなくドイツ本国においても彼および彼の業績については忘れられ、今日にいたっている。

しかしながら、近年、私はその足跡を追いかけており、京都大学名誉教授吉田次郎氏による翻訳稿との出会いをきっかけに、彼の素顔が少しずつながら解ってきた。たとえば、1904年（明治33）、ドイツへ留学した若き日の芳賀矢一（1867－1927）との、明治34年から35年にかけての交流、1905年（明治38）から1906年（明治39）まで、プレーメンの美術館から浮世絵版画収集を命ぜられて来日したこと、京都の金剛謹之輔邸での能面調査の様子、あるいは1923年4

月19日、ペルチンスキーがロンドンから英語で喜多流の家元の喜多六平太へ出した手紙の存在、などである。この手紙は写真（一部）とともに雑誌『喜多』大正13年（1924）1月号に掲載されており、英文学者で喜多流を嗜んだ戸川秋骨（1870－1939）が翻訳している。

なお、2003年9月、筆者はボン大学日本学研究所所長 Josef Kreiner（ヨーゼフ・クライナー）教授のご配慮により、ケルン在住の東洋美術蒐集家 Trudel Kiefisch（トゥルーデル・クレフィッシュ）氏にお目にかかることができ、氏のご高配によって、1911年から1913年に書かれたペルチンスキーの手紙数種を閲覧することができた。これら新資料についての紹介と考察は、別稿に譲ることにしたい。ともかく、わずかずつではあるが、ペルチンスキーの実像に迫りたいと願っている。

10 外国人からのメッセージ

つぎに外国人たちの能に対する発言の一端を示し、能の根底を貫く本質を考えてみよう。とりあえず、八人の芸術家・研究者・建築家たちの発言をあげてみる。

- A 能の美しさと力とは集中に存する。あらゆる要因－装束・動作・詩文・音楽－は、あの単一明澄な印象を生み出すように結合する。おのおのの戯曲は何かしら根源的な人間関係や情緒を表現する。 フェノロサ
- B 能は生きた彫像である（「能は動く彫刻である」）。 ノエル・ペリ
- C 劇、それは何事かの到来であり、能、それは何者かの到来である。
ポール・クローデル
- D 私は元々古い時代のものは好きなのだが、能は死ぬほど退屈した。
ザツキン
- E 能の静止は息づいている。能を見て、死ぬほど感動した。
ジャン・ルイ・バロー
- F 能は情感という点で統一性をもつが、それはまたイメージの統一と呼んでもいい。少なくとも優れた作品はすべて統一イメージを強調するように構

成されている。

エズラ・パウンド

G この舞（注・〈道成寺〉の乱拍子）は芸術的手段の極度の圧縮だ。これ以上の圧縮は全く不可能であり、従ってまたその芸術的効果もこれ以上に出ることはできない、実に讃嘆すべき芸術だ。これが日本なのだ、最も単純なものの中に、—— 一切がある。

ブルーノ・タウト

H 日本には長い詩がない。日本の詩はみんな三十一音節とか十七音節くらいの短いものが主であると思っていた。ところが、日本にはすばらしい長詩がある。それは謡曲である。

ドナルド・キーン

いずれも興味深い発言である。つぎに少し詳しく見ていこう。

A フェノロサ 能の美と力とは集中に存する

東洋美術研究家アーネスト・フェノロサの発言である。先にも述べたように、彼は1884年モースに誘われて梅若実（うめわさね）に謡を習った。梅若実の門入帳に名前が見える。彼は日本語がよく分からなかったらしいが、英文学者の平田禿木（かぶき）という良き協力者を得て、研究や翻訳を進め、詩人的直感で、能の美を追求し、「能の美しさと力とは集中に存する」と喝破したのである。能の表現を貫く「集約」の精神と見てもいい。さすがは日本美の発見者である。

なおフェノロサも能を日本のリリカル・ドラマと洞察し〈錦木〉（杜若）ほかを翻訳した。のちに触れるが彼の遺稿を詩人のエズラ・パウンド（1885－1972）が整理して共著の形で出版した“*Certain noble plays of Japan : From the Manuscripts of Ernest Fenollosa, chosen and finished by Ezra Pound, with an introduction by William Butler Yeats*”（Church Town 1916.『ある高貴な日本の劇』）の初版には、冒頭に梅若実の肖像写真を収めている。自分を能へ導いてくれた恩人梅若実に対する感謝の念を抱いていたことが偲ばれてゆかしい。

B ペリ 能は生きた彫像である

先程も触れたフランスの先駆的な能の研究者で、優れた著作を残したノエル・ペリの文章である。能の動きを「生きた彫像」（歩く彫刻）と把握しているが、歌舞伎と比較するとき、この言葉は説得力をもって生きてくる。「歩行の芸術」ともいわれている能は、たしかに、絵画美よりも彫刻美と言ってよい。

彫刻家の高村光太郎に「能の彫刻美」という優れたエッセイがあるが（『能楽全書』第六卷所収、1944、創元社）、それと通底するようである。

日本語に明るく日本の文献資料にも読破していたノエル・ペリの能楽研究は、いち早く『能楽』大正2年（1913）1月号の付録として、その和訳が「能の研究」と題して掲載され、72頁にもわたる大論文であることは先に述べたとおりであるが、彼は明治半ばから大正初期にかけて、我が国の能楽研究に多大の貢献をなしている。ペリの談話は当時の新聞にも載っており、人々の関心の高さも伺われる。

フランス語圏に能楽を紹介した功績は大きく、交通事故による急逝が惜しまれるが、没後二十年を記念し、その功績を讃え、日仏会館杉山直次郎博士の尽力により、生前の著作「能研究序説」（1909）、「五番の能」（1911～13）、「続五番の能」（1920、21）及び「狂言」ほかを収めた“*Le Nô*”（1944、『能』）が日仏会館から刊行された。戦時中で物資の乏しい中、よくぞ刊行したものと畏敬の念を深くする。大冊で、しかも挿絵や写真も多く、上質紙を用いた上製本と普通紙の並製本の二種類を出版。この本については、井畔武明訳の『ノエル・ペリ 能』（1975、桜楓社）、同『ノエル・ペリ 十番の能』（1976、桜楓社）があり、ノエル・ペリの能楽研究の特色にも言及している。

C クローデル 劇、それは何事かの到来であり、能、それは何者かの到来である

大正末期から昭和初期にかけて駐日フランス大使として赴任し日本文化に関する優れたエッセイを残した劇詩人 Paul-Charles-Marie Claudel（ポール・クローデル）（1868－1955）のエッセイ“*L'Oiseau noir dans le Soleil levant*”（Paris, 1929 『朝日の中の黒い鳥』）の発言である（内藤高氏訳の講談社学術文庫本による）。ちなみに姉はロダンの弟子で恋人でもあったカミュ・クローデル。

クローデルは日本語ができなかったが、劇詩人としての鋭い感性で、能の本質を洞察している。有名な言葉が「劇、それは何事かの到来であり、能、それは何者かの到来である」で、みごとに能の本質を説示している。能は人間の心を描き、心のたゆたいを描く劇である。そこには何者かが立ち現れるのである。このクローデルの発言をよく示している作品がある。それは、例えば世阿弥の

名作の一つ〈清経〉。平家の運命を悟った左中将平清経は戦線を離脱し、柳が浦で入水するが、その清経の霊が都の妻の枕元に静かに現れるのである。

能の楽器と演奏についても次のように述べている。

打楽器はリズムと運動を与えるためにそこに存在し、物悲しい笛の音は、間を置いて、われわれの耳に、流れゆく時のもつ抑揚を伝え、演者たちの背後から、時間と瞬間との対話を伝えるのである。

と鋭く本質に迫り、地謡についても、

合唱は劇の展開に直接加わらない。ただたんに非人称的な註釈をその展開につけ加えるだけである。合唱は過去を語り、風景を描写し、思念を発展させ、登場人物を解き明かす。それは詩と歌によって答え、応じ、言葉を語る立像〔登場人物のこと〕の傍らに蹲って、夢を見、つぶやくのである。

と、みごとな洞察力を示している。初代梅若万三郎（1868－1946）や松本長（1877－1935）・野口兼資（1879－1953）、桜間金太郎（弓川。1889－1957）といった能の名手たちが輩出した大正から昭和初期にかけての観能体験と、劇詩人としての鋭い感性が、こうした至言を生み出したのであろう。

D ザツキン 能を見て死ぬほど退屈した

E バロー 能を見て死ぬほど感動した

Dはロシア出身の彫刻家ザツキン（1890－1967）の言葉である。**E**は観世寿夫（1825－1978）とも交流のあったフランスの舞台俳優バロー（1910－1994）の発言であり、まったく対照的な発言である。

ザツキンは戦前は二科会外国会員で、1959年（昭和34）に展覧会を機に来日した。その年の6月、松本謙三舞台五十年・還暦記念能が開かれ、ザツキンやフランスの映画監督デュビエら20人の仏国文化使節団も招かれ、二世梅若万三郎の〈熊野〉を見た。その時の発言である。この「能を見て死ぬほど退屈」発言を能楽協会側が問題視し「能芸術を冒瀆するもの」との声明を出した。た

しかに、説明も舞台背景も何もない能を何時間も見せられたら退屈し飽きてしまふであろう。この退屈ということに関連して、野上弥生子のエッセイ「熊野松風に米の飯」(『婦人之友』第31巻第9号、1937)を引いてみよう。

能はおもしろいものではない。私たちの現代の神経では容易におもしろがられないやうに出来てゐるからである。なにが退屈だと云つて下手な能をキチンと正座して何時間も見せられる以上に飽き飽きすることはないであらう。それが名人の手にかかる、まつ黒な鉄鉾が溶鉾炉に投げこまれたやうに燦然と輝いて来る。舞台の上にちつと^{うづくま}跼つていだけで天地いづまいに駈け廻る程おもしろく、大抵は欠伸^{あくび}の出る序の舞が五段はおろか十段でも二十段でもよいと思うくらゐ美しい。まことに日本なるかなと恍惚して見とれるやうなこの優れた仮面芸術が、ほんとうに観せたいと思ひ味はせたいと思ふ人達から隔離されてゐるのは奇妙なことである。昨冬万三郎の妖精のやうに美しい「松風」を見た時知つた人をみんな引つ張つて来なかつたのを後悔した。これはまた能の古風に時代後れな興行法に対する不満であつた。(『野上弥生子全集』第十九巻、岩波書店、1981)。

翌1960年(昭和35)7月、ジャン・ルイ・バローと、テアトル・ド・フランセ一行のための観能会が開かれ、観世寿夫の〈半部〉や野村万蔵(1898-1978)の〈瓜盗人〉などを鑑賞している。力を内に湛えた能の静止。表面的には動きの殆どない姿でも、その内部には物凄いエネルギーが息づいていることをバローは感じ取っていたのである。「名人の手にかかる、まつ黒な鉄鉾が溶鉾炉に投げこまれたやうに燦然と輝いて来る。舞台の上にちつと跼つていだけで天地いづまいに駈け廻る程おもしろく、大抵は欠伸の出る序の舞が五段はおろか十段でも二十段でもよいと思うくらゐ美しい」。さればこそ「能の静止は息づいている」のだ。

F パウンド 優れた能にはイメージの統一がある

イマジズム運動の代表格だったアメリカの詩人エズラ・パウンド(1885-1972)の言葉である。周知のように、イマジズムとは、1910年代、エズラ・パ

ウンドが主唱した欧米における自由詩運動で、フランスの象徴詩や日本の俳句にヒントをえて、イメージを重んじた自由詩を提唱した。その三原則は「主題を直接に扱うこと」「提示に役立たない言葉を全部省くこと」そして「従来のメトロノームのような韻律によらないで、自由な音楽のフレーズで詩を書くこと」とされている。

1913年（大正2）、フェノロサ未亡人から謡曲英訳および研究ノートなどの遺稿の整理を託された彼は、共著の形で“*Noh or Accomplishment: A Study of the Classical stage of Japan*”（London, 1917）を上梓した。パウンドは日本語が不十分だったようであるが、詩人的直感から「優れた能には、一曲を通して流れ続ける統一したイメージ」があると指摘したのである。たしかに、〈高砂〉の松、〈忠度〉の桜、〈桧垣〉の水、〈桜川〉の桜、〈西行桜〉の桜、〈融〉の月、など、能一曲を通して流れ続ける統括的物象・事象がある。“統一イメージ”の存在を指摘したのは、いかにもイマジストの詩人らしい。この統一イメージは世阿弥や世阿弥の子の観世元雅や娘婿の金春禅竹たちの作品に顕著なのである。したがって能の作者考定に関しても活用できる側面もある。

またパウンドと親交の深かったアイルランドの詩人・劇作家 William Butler Yeats（イェーツ）（1865－1939）はその訳稿に触発され、能に詩・音楽・舞踊が一体化した理想的な演劇形態を見いだし舞踊劇〈鷹の井戸〉を創作し、1916年ロンドンで初演した。なおパウンドとイェーツの仕事に関しては、成恵卿『西洋の夢幻能—イェーツとパウンド』（1999、河出書房新社）が詳しい。

ちなみに1949年（昭和24）、同曲に触発されて日本楽劇研究者の横道萬里雄氏（1916－）が翻案したのが〈鷹の泉〉である。さらに1967年（昭和42）、横道氏が新しく書き換えたのが鏡仙会による新作能〈鷹姫〉であり、成功を収めた。以後〈鷹姫〉はしばしば上演されており、海外公演でも上演されている。日本から発信された能楽が地球を一回りして戻って来たという感じである。

G タウト 最も単純なものの中に、一切がある

ドイツの建築家ブルーノ・タウト（1880-1938）の日記からの引用である。彼は1933年（昭和8）、日本インターナショナル建築会からの招きに応じて来日し、1936年秋、イスタンブール芸術大学教授としてトルコへ赴任するまで、

仙台や高崎での工芸指導のほか、著述に携わり、桂離宮と伊勢神宮を建築の世界的奇跡と讃えるなど、日本美の再発見者として親しまれた。日本滞在中、克明な日記を残しているが、この言葉は、1935年3月2日（土）東京の水道橋の宝生会能楽堂で開かれた故藤田多賀蔵及び板本伊三吉七回忌追善能における、観世鍔之丞の〈道成寺〉を観たときの記録である。この時、彼は深い感動を受けたようで、つぎのように起筆している（引用は『日本－タウトの日記 1935-36年』篠田英雄訳。岩波書店、1975に拠る）。

『道成寺』は、これまで観た能のうちで最も壮麗なものだ。道成寺で、新たに鑄られた鐘の供養が営まれることになった。最初に能力が出て来て、諸人に参詣を勧める。そこへ一人の若い女（シテ。面をつけている）が舞台に現れる。その前に住僧は、女人禁制だから境内へ女を入れてはならない、と厳しく命じておく。シテの白拍子は、目もあやな衣裳をつけ、その下に蛇の鱗を形どった縫箔を着、額には鬘を巻きその端を長く後ろに垂らしている。三十分も続く長い舞、恐らく深い悲怨を表現しているのであろう。この舞に伴う音楽は小鼓だけで、楽師は『ホオーウ』という掛声を発しながら、二つの異った音を打ち出している。だがこれでも『舞』なのだろうか、殆ど身体の動きがない！ 小鼓の音に応じて、或は爪先を少し揚げ或はこれを静かに下ろすだけだ、こうして実に緩やかな足取りで舞台を廻るのである、見所の人々はシテの姿を前から側からも、また後ろからも長いこと見ている。

とあって、乱拍子について細かく観察している。ほとんど動きがなく、小鼓の音と掛け声で進んで行く「乱拍子」は、普通の人だったら、それこそ死ぬほど退屈するかもしれない。しかし彼は「この舞は、芸術的手段の極度の圧縮だ。これ以上の圧縮は全く不可能であり、従ってまたその芸術的効果もこれ以上に出ることはできない、実に讃嘆すべき芸術だ。これが日本なのだ、最も単純なものなのに、—— 一切がある」と讃嘆しているのである。さすがは日本美の再発見者だ。古都奈良の五重塔の美しさを「凍れる音楽」と表現したタウトならではの発見である。

H キーン 日本にはすばらしい長詩がある。それは謡曲である

日本研究者のドナルド・キーンコロンビア大学名誉教授（1922－）の発言である。この言葉は「詩としての謡曲」の再発見である。これまで見て来たように、西洋の近代の先人たちは、能の台本たる謡曲を「日本のリリカル・ドラマ」と把握し、能が詩的な劇であることを洞察していた。

能の台本でありつつ詩としても味読できる謡曲は、ひとつひとつの言葉が音楽的な響きをもっている。そして、そこには、和歌や連歌の伝統的な詩法が結晶している。古歌・名句が引かれ、連なり、本歌のもつドラマが背景に重なっている。懸詞によって二重の意味が込められ、次の語を引きだして行く。縁語や序詞や寄合いなどによって紡ぎ出された言葉が、新たなイメージを喚び起こし、韻律の美しさが快い流れとなって、起伏を刻みつつ、リズムのある長い詩を現出させている。さすがはキーン教授である。筆者も氏の発言に導かれ「詩としての謡曲」の再発見に努めているが、強調したい魅力である。

11 能の根底を貫くもの

以上は、みな能の本質に関わる発言である。「リリカル・ドラマ」の発見、「集約の精神」、「能は生きた彫像である」、「劇、それは何事かの到来であり、能、それは何者かの到来である」、「統一イメージの存在」、「力を内に湛えた能の静止」、「最も単純なものの中に、一切がある」、「詩としての謡曲」の発見など、これらは観阿弥・世阿弥たちの室町時代から現代に至るまで、能の表現を貫き、流れ続けている特質といってよいであろう。

演技や演出が細緻になり、能の衣装も豪華になり、能の所要時間が倍近く長くなっても、能の表現や発想の根底を貫く精神は変わらない。外国人たちは先入観にとらわれず、新鮮な眼で、新鮮な感性で、能の本質を鋭く把握し、表現の特質を深く洞察している。豊かな学殖と鋭敏な感性で日本の能楽の真価を的確に認識し、その神髄に分け入り、次の世代による翻訳や研究や創作活動に参与しているのである。

12 能・狂言の翻訳のひろがり

全訳に抄訳も加え、現在、能は約200曲、狂言は約110曲が外国語に翻訳されているようであるが、これに筋の紹介も含めると作品の数はもっと多くなるであろう。一般的な作品にまじって、廃絶曲〈生贄（いけにえ）〉や〈鶉羽（うのは）〉、現行曲とは同名異曲の世阿弥自筆本が伝わる〈雲林院（うんりんいん）〉、戦時中の1941年に作られた新作能〈忠霊（ちゅうれい）〉、フランス中世の笑劇〈洗濯桶 Le cuvier〉を典拠とする飯沢匡の新作狂言〈濯ぎ川〉なども翻訳されている。

そのなかで最も多い言語は英語である。ほかにフランス語・ドイツ語・オランダ語・スペイン語・ポルトガル語・イタリア語・ロシア語・ルーマニア語・中国語・シンハラ語（スリランカ）などもあり、その多彩なひろがりに驚かされる。

今、例として戦後まもない1947年（昭和22）に旺文社から発行された能〈善知鳥（うとう）〉の英訳を紹介する。半紙本の大きさの和綴本で、“*Birds of Sorrow – A Nô Play –*”（『悲しみの鳥－能－』）という題がつけられている。訳者は、Meredith Weatherby & Bruce Rogeers（メレディス・ウェザビーとブルース・ロジャース）で、彼らは日本の芸術に深い理解をもった優れたアメリカの文化人であった。日本の古典文学の中から能〈善知鳥〉を選び翻訳したのである。美しい装丁と挿画は世界の棟方志功（1903－1975）で、今年がちょうど生誕百年にあたる。

13 能楽論、音楽や演技、面・装束など総合的研究

世阿弥（1363－1443?）の能楽論が広く世に知られるようになったのは、1909年（明治42）2月に刊行された歴史学者の吉田東伍（1864－1918）校注『世阿弥十六部集』からであるが、前述のようにウェーリーは室町時代の能の姿を知る絶好の資料として、同書に言及し、ヨーロッパで最初に世阿弥能楽論を紹介した。ほぼ同時期にペリも言及しているが、ウェーリーの仕事が欧米でのその後の能楽研究に大きな影響を与えた。以後、世阿弥の芸術論は国際的に

注目され、最も代表的な『風姿花伝』は、英語・フランス語・ドイツ語・デンマーク語・ロシア語・タイ語・中国語・韓国語などに翻訳されているし、近年では、金春禅竹の能楽論も研究されている。

また近年は、外国人による能面・狂言面や装束に関する紹介や調査・研究も盛んになり、優れた成果が発表されている。謡や囃子など能の音楽に関する研究も行われるようになった。そして、能は、時空を超越した劇として世界の演劇人から注目されている。

おわりに

能楽堂の観客席に外国人の姿が見られるようになったと報じた雑誌『能楽』（池内信嘉・主宰）は、1905年9月から1907年3月までであるが、英文欄を設け、能の梗概と狂言の抄訳を載せている。前述のようにノエル・ペリの大作「能楽研究序説」を日本語に訳して一挙に掲載したのも同誌であった。1914年（大正3）創刊の『謡曲界』も1916年7月から1917年8月までの短期間ながら、英文欄を開設し、詩人野口米次郎（1875－1947）が担当した。国際的な視野に立った先人たちの気概はまさに気宇壮大である。

以後、インドの詩人で哲学者のタゴール（1861－1941）、イギリスの劇作家で批評家のショー（1856－1950）、理論物理学者のアインシュタイン（1879－1955）など、戦前だけでも、多くの外国人が鑑賞している。そして、我々の心に響くエッセイを残している。

能・狂言や世阿弥が外国に知られ、研究や新たな芸術の創造に寄与してきた背景にはこのように多くの先人たちの努力があった。

今はその一端を述べたにすぎないが、外国の研究者や芸術家たちが送ってくれたさまざまなメッセージは、私たちに新たな視点を与えてくれる。それらを考察しつつ、あらたに発信していきたい。日本発信の国際日本学の構築の意味もここにある。そして「ナショナルに徹すればインターナショナルに通ずる」。今私は、このことを強く感じている。